

マーガレット・エドソンの『ウィット』

—ゴシック的「狂気の科学者」のモチーフ—

神 崎 ゆかり

The Gothic “Mad Scientist” Motif in Margaret Edson's *Wit*

KANZAKI Yukari

Abstract

Margaret Edson's first play *Wit* (1993), which won the Pulitzer Prize in 1999, features Vivian Bearing, a professor specializing in John Donne's metaphysical poetry. She is hospitalized dying of advanced ovarian cancer. Her doctors Kelekian and Jason have Vivian undergo an experimental treatment with strong side effects. The treatment is very aggressive and lasts for no less than eight weeks. For the doctors, Vivian is no longer a human being but “material” for their medical research, or in Dr. Moreau's term a “problem” for their intellectual desires.

Focusing on the unsympathetic attitudes of Kelekian and Jason toward their patient Vivian, this play can be classified within the Gothic genre and containing the “Mad Scientist” motif. What allows this play from falling into a simple dichotomy between the assailants and the victim, however, is the fact that Vivian herself shares the character of “Mad Scientist.” This paper analyzes how Vivian can be characterized as a mad scientist along with her doctors.

Keywords : Margaret Edson *Wit* Gothic “Mad Scientist” Motif
キーワード : マーガレット・エドソン 『ウィット』 ゴシック 「狂気の科学者」のモチーフ

I

アメリカの劇作家マーガレット・エドソン (Margaret Edson, 1961-) の処女作『ウィット』 (*Wit*, 1993) は、1995年1月24日に、カリフォルニア州コスタ・メサのサウス・コー

平成21年11月6日 原稿受理

大阪産業大学 人間環境学部文化コミュニケーション学科教授

スト・レパトリー・シアターで初演、その後1998年にニューヨークで上演された。初演にいたるまでの2年間はたびたび上演を拒否されたにもかかわらず¹⁾、ニューヨークでは大成功を収めその年のほとんどの賞を獲得しただけでなく、翌1999年にはドラマ部門のピューリッツァー賞まで受賞するに至った。受賞によってエドソンは一躍有名になったが、劇作家としてのキャリアには全く執着していないようで²⁾、現在はジョージア州アトランタの幼稚園で教育に専念している。彼女は、かつてワシントンDCにあるエイズ・癌研究所付属病院でソーシャルワーカーとして働いたことがあり、『ウィット』はこの病院での経験をもとに書かれたものである³⁾。

『ウィット』の主人公で大学教授のヴィヴィアン・ベアリングは、17世紀を代表するイギリスの形而上詩人ジョン・ダン (John Donne, 1572-1631) の研究者である。50歳になる彼女は末期の卵巣癌に侵されていて余命いくばくもない。劇は、抗がん剤の副作用で髪の毛を失ったヴィヴィアンが野球帽をかぶり、点滴スタンドを押しながら登場するところから始まる。気丈な彼女は、主治医たちの勧めで最も強力な治療を受けているのだが、次第にその苦痛に耐えられなくなる。そして、最終的には「蘇生処置」を拒否し、看護婦スージーとの人間的触れ合いに救われて息を引き取る。最終場面は、ヴィヴィアンがベッドから降り立ち、野球帽、腕輪、ガウンなど身につけていた物すべてを床に落として全裸でライトに手を伸ばした瞬間、暗転となって終わる。ここに至って、彼女は死の恐怖を克服して安らかにこの世を去り、永遠の生命に目覚めたかに思われる。エドソン自身も「これは救いをテーマとした劇である」と主張している⁴⁾。

作者の意図はさておき、すぐれた作品は様々な解釈を誘うものである。その証拠に、すでにこの作品を扱った研究論文はいくつかの興味深い議論を展開している。フェミニズム的観点からは、デシャザー (Mary K. Deshazer) が女性特有の癌に侵された主人公の身体的問題を他の女性劇作家の作品と比較しながら論じている。ギヴァン (Jennifer Givhan) は、ヴィヴィアンが学者や医者を使う父権的、構造的言語を捨てて、優しくて思いやりのある女性的なコミュニケーションに到達する過程を分析している。あるいはリモン-ケナン (Shlomith Rimmon-Kenan) は、様々な二項対立的要素を比較しながら、この作品がジョン・ダンの形而上詩にみられる比喩のように、対立するものの溝を埋めていることを分析している。また、主人公が言葉に対して並々ならぬ関心を抱いていることか

1) Adrienne Martini, "The Playwright in Spite of Herself," *American Theatre* 16 (1999): 23.

2) Martini, 25.

3) Suzanne Gordon, "Nursing and Wit," *American Journal of Nursing* 99 (1999): 9.

4) Martini, 24.

ら、言語の分析を通して言葉が構築する『ウィット』の世界を探るキーヴェニー（Madeline M. Keaveney）や、ダンの詩と『ウィット』の場面を比較して肉体と魂の関係を説くラモント（Rosette C. Lamont）の研究も示唆に富む⁵⁾。

このように多角的視点からの議論が可能であるが、同時に現代医学における「知の探究」が引き起こす身も凍るような恐怖に着目すると、スノッドグラス（Mary Ellen Snodgrass）が指摘しているように、『ウィット』は「狂気の科学者」（“Mad Scientist”）をモチーフとする「ゴシック作品」であるといえる⁶⁾。確かに、知識への過剰なまでの探究心ゆえに、ヴィヴィアンを生身の患者ではなく「研究対象」としかみることができないケレキアン博士とジェイソン医師には、ゴシック小説の「狂気の科学者」の姿が重なる。

しかし、それ以上にこの作品が興味深いのは、主人公ヴィヴィアンがその科学者たちの犠牲者であると同時に、彼らに荷担していることである。そこで本稿では、ケレキアン博士とジェイソン医師だけでなく、文学博士ヴィヴィアンも「狂気の科学者」のひとりであることを例証したい。

II

ゴシック文学を、18世紀中葉から19世紀初めにかけて流行した恐怖小説群だけを念頭に置いて考えるならば、『ウィット』はゴシックとは程遠い作品であると思われるに違いない。そこには、超自然的な出来事や、現実離れした中世的な舞台設定、迫害される乙女、邪悪な悪漢などの登場が見られないからである。舞台は現代最先端の治療が可能な大学病院で、主人公は癌患者の女性という、決して珍しくない現実の光景である。

しかし、ゴシック文学が合理主義の影響で、物事はすべて理性的に解決できるという信仰にも似た考え方に対する反動として生まれ、その理性を代表するような科学（医学も含む）に懐疑的であることを考えるならば、『ウィット』のゴシック性が予想できるであろう。つまり、科学や医学の進歩とその研究の在り方に対する不安や恐怖を表現するにあたって、ゴシック文学は研究に過剰な好奇心を抱きその知識を悪用する人物、すなわち「狂気の科学者」を主人公として好んで採用してきたのである。

ゴシックにおける「狂気の科学者」の原型は、中世からルネサンス期の魔術師や錬金術師にみられる。中世からルネサンス期にかけては、「魔術と科学はひとつのものだった（中

5) 参考文献参照。

6) Mary Ellen Snodgrass, *Encyclopedia of Gothic Literature* (New York: Facts On File, 2005) 219.

略)が、大衆の想像力や制度としての宗教は、彼らの知識がサタンに由来するものと考えた。ファウストのようにゴシックの魔術師は魂を売ることによって知識と権力を手に入れると思われた」からである⁷⁾。魂を売った結果、彼らはしばしば「人嫌いやせいぜいのところ無感動な人にありがちな、社会的な絆や義務を無視する人間」⁸⁾として描かれるようになった。すなわち、邪悪な好奇心を抱く非人間的な人物で、彼らは初期ゴシック小説に登場する悪漢の策略に匹敵するような恐ろしい調合剤に手を染めるのである。ダーウィンの進化論で神の死が告げられ、動物と人間の確固たる境界が取り払われてからは、生命や自然界の神秘を解き明かす知識を探究するあまり、自然の摂理を侵犯したり人間的優しさに欠けたりする科学者が、「狂気の科学者」のステレオタイプとなった。

「狂気の科学者」の代表的ゴシック作品といえば、やはりメアリ・シェリー (Mary Shelley, 1797-1851) の『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein*, 1818) であろう。この物語のヴィクター・フランケンシュタイン博士は、生命誕生の神秘を解明するために死体を掘り起こして集め、切り取った部位をつなぎ合わせて人造人間を創造する。ところが、できあがったのは予想に反する醜悪な怪物であったため、ヴィクターは恐怖に駆られて怪物を放置して逃げだす。見捨てられた怪物は、復讐するためにヴィクターの周りの人間を次々に殺害する。すなわち殺された人たちは、ヴィクターの好奇心の犠牲になったのである。

19世紀のイギリス社会で、当時の人々が科学に対して期待と同時に抱いていた恐怖や不安は、21世紀の人間が原子力やコンピューター、あるいは遺伝子工学などに対して抱く不安に似ている。19世紀末になると、作家たちは「科学が人間の獣性の内部まで探索する退廃的で尊大なものに成り果てていく時代の恐怖を、知性の墮落を証明するかのように描きだした」⁹⁾。たとえば、ロバート・ルイス・ステイヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850-94) の『ジキル博士とハイド氏』 (*Dr. Jekyll and Mr. Hyde*, 1886) では、周りの人々から尊敬される温厚なジキル博士が、人間の心に巣くう邪悪な思念や欲望を分離させる実験に手を染める。その結果生まれた自己の分身ハイド氏は、悪魔の化身かと思われるほど極悪非道な人間で、平気で殺人も犯す。結局、生みの親ジキル博士もハイド氏を抑制することができなくなって共に命を絶つことになる。これに続き、H. G. ウェルズ (H. G. Wells, 1866-1946) の『タイム・マシン』 (*The Time Machine*, 1895) や、『モロー博士の島』 (*The Island of Doctor Moreau*, 1896)、そしてブラム・ストーカー (Bram Stoker,

7) Marie Mulvey-Roberts, ed., *The Handbook to Gothic Literature* (Houndmills: Macmillan, 1998) 256. 引用は翻訳、ゴシックを読む会『ゴシック入門：123の視点』(英宝社、2006年)による。

8) クリス・ボルディック『フランケンシュタインの影の下に』谷内田浩正他訳 国書刊行会 1996年 236。

9) ジャック・サリヴァン『幻想文学大事典』高山宏・風間賢二監修 国書刊行会 1999年 571。

1847-1912) の『ドラキュラ』 (*Dracula*, 1897) などの作品が次々と登場する。アメリカでも19世紀半ばごろから、ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) の「痣」 ("The Birthmark", 1843) や「ラパチーニの娘」 ("Rappaccini's Daughter", 1844) といった短編をはじめとして同様のテーマを扱った作品が生まれている。このような物語の主人公たちは、傲慢で、好奇心の虜となった「狂気の科学者」たちである。エドソンの『ウィット』もまさにこの系譜に位置づけられる。

Ⅲ

『ウィット』における「狂気の科学者」は、まずヴィヴィアンの主治医ケレキアン教授と彼の弟子でありかつヴィヴィアンの教え子でもあるジェイソン・ポスナー医師に代表される。進行性転位卵巣癌の末期であるヴィヴィアンに、ケレキアンはまだ開発中の強烈な副作用を伴う治療を実施する。しかし、いかなる治療も現段階では彼女の癌を治すことができないため、彼女は単なる実験台にすぎず、医者たちの学問的好奇心の犠牲である。癌そのものよりも苦痛である治療に耐えるヴィヴィアンの気持ちへの配慮など、彼らには全く見られない。ケレキアンが、ヴィヴィアンに癌の宣告をする場面である。

ケレキアン：あなたは癌です。

ヴィヴィアン：（観客に向かって）分かる？ 忘れもしないわ。かなりの衝撃だった。

私は立っていられなかった。（彼女はドスンと座り込む。）

ケレキアン：座ってください。ベアリングさん、進行性転移卵巣癌です。

ヴィヴィアン：続けて。

ケレキアン：あなたは教授ですね、ベアリングさん。

ヴィヴィアン：あなたと同じですわ、ケレキアン博士。¹⁰⁾

単刀直入に語り始め、しかもそれが悪性であることを告げたあと、ケレキアンはその治療の手順とそれによる副作用について淡々と説明する。「浸潤上皮性卵巣癌の場合、最も効果的な治療法は化学療法です。われわれは、まだ実験中の多剤併用治療を開始しており、これは第3期以上の卵巣癌患者への投与を目的とします」(8) と始める彼の言葉は、医学用語の羅列で門外漢には理解しがたい。しかも、その治療が最も強力で患者は副作用の

10) Margaret Edson, *Wit* (New York: Faber and Faber, 1999) 7. 以下、作品からの引用はこの版により、本文中にページ数を記す。

耐えがたい苦痛を伴うにもかかわらず、これは「私たちの知識に大いなる貢献をしてくれる」(11) といって、自分たちの好奇心を何よりも優先している。

彼の助手ジェイソンの場合、その好奇心はさらに顕著である。若手の癌研究者として一旗揚げたいと思っているジェイソンは、研究熱心ではあるが現在受けている「臨床期間」を無駄だと感じている。彼は、「臨床期間」についてヴィヴィアンに不満をもらす。

ジェイソン：みていてください、自分の研究所を持ちますから。この臨床期間を無事終了したらですが。

ヴィヴィアン：人と関わる部分ですね。

ジェイソン：全員受けなければいけないもので。偉大な研究者は全員。僕たちが臨床医と知的に会話ができるようにとね。研究者をまるで障害者扱いですよ。臨床医なんて間抜けな奴らですよ。へつらうだけで。まるでクレアチニン測定の話をするにも手を握らないといけないみたいです。くだらないことは勘弁してって感じです。(57)

野心に満ちているジェイソンにとって、興味があるのは研究の成果に結びつくことだけである。患者との人間的触れ合いは時間の無駄だと思う彼の態度には、「狂気の科学者」の性質がうかがえる。

ケレキアンとジェイソンをチームとする治療は、ヴィヴィアンが副作用に苦しんでいてもお構いなしに進められる。ヴィヴィアンがジェイソンに「患者がひどく不安になって怖がっている場合はどうするの」(58) とかろうじて聞くと、患者の気持など考えたことがないジェイソンは彼女の病状が進行し意識がいよいよ朦朧となってきたのだと勘違いして、「ベアリング教授、アメリカの大統領はだれですか」(58) と尋ねる。それに対し、ヴィヴィアンは本音を伝えることができなくなって、「大丈夫」(58) と繰り返すだけである。

また、ケレキアンがジェイソンと他の研究員たちを連れて回診に来た時も、患者の前で無神経にも治療の結果や副反応の話だけをして退室する。ジェイソンも、ヴィヴィアンの露わになった腹部にガウンや布をかけることもなくそのまま立ち去る。彼女は、さんざん見世物扱いされた後、腹部を露出したまま放置されるのである。ヴィヴィアンを人間としてではなく、研究対象と考えている教え子ジェイソンの扱いは、彼女にとっては耐えがたい屈辱である。

ふたりの医者たちとは対照的な看護婦スージーの優しさに触れ、いかなる治療や実験も受けて立つと豪語していたヴィヴィアンが、死の直前に自らのプライドを捨てて「蘇生拒

否」を選択していたにもかかわらず、ジェイソンが早まってコードチームを呼んでしまうのも、彼の研究への好奇心が先行していたせいだと考えられる。ジェイソンは、スージーの「彼女は蘇生拒否なのよ」（82）という必死の訴えに、「彼女は研究対象だ」（82）と叫ぶ。ジェイソンのこの言葉は、H. G. ウェルズのモロー博士の言葉そのままである。孤島で、動物に手術をして人間化する実験に手を染めたモロー博士は、動物の苦痛に心をいためるブレンディックに次のようにいう。

いいか、私はそれが導くままに研究を続けてきた。(中略)君にはこれが研究者にとってどういうことを意味するのか、知的情熱が募ってくるとはどういうことかなど想像もつかないだろう。知的情熱の消えることのない喜びなど分からないだろう。目の前にあるものはもはや動物、つまり人間の仲間の生き物ではなく、課題なのだ。同情して心を痛めるだと、そのようなことは何年もまえに経験したことにすぎない。(75)

モロー博士のように、研究に没頭するあまり患者の気持ちを顧みなかったジェイソンは、スージーの訴えを無視したために取り返しのつかない失態を晒すことになる。コードチームのメンバーたちは自分たちが間違っただけで召集されたと分かると、「医者失態だ」「そいつは誰だ、実習生か」「蘇生拒否なのにわれわれを呼びだすなんて」（85）と口々にジェイソンを罵って去っていく。ジェイソンはそれまでの自信満々の態度と打って変わって床に倒れ込む。この場面のジェイソンの処置の行き過ぎや、コードチームの蘇生処置の様子は恐怖以外の何ものでもない。コードチームの電気ショックによって、すでに息を引き取っているヴィヴィアンの身体は、ベッドの上で弓なりにのけぞったり跳ねたりするのである。

しかし、彼らの犠牲者ヴィヴィアンが、先行するゴシック作品の犠牲者たちと異なるのは、彼女自身が傲慢でプライドの高い科学者の一端を担っている点である。死の直前まで、彼女もまた「狂気の科学者」であったのだ。

IV

17世紀の英詩、それももっとも難解といわれる形而上詩人ジョン・ダンの研究者であるヴィヴィアンは、自分の冷静さと厳格さに誇りを持っていた。彼女は、ジョン・ダンの詩の内容に魅かれて研究を始めたというより、ウィットに富むその詩の難解さに興味を抱いたようである。そして、ダンの研究に関しては、「私ほど優れた者はいない」（20）と自負している。したがって、先のケレキアンによる癌宣告の場面でも、立ってられないほど

の衝撃を受けながらも、「あなたは教授ですね、ベアリングさん」(7)という彼の言葉に、自らの衝撃と動揺を表現することができなくなる。そして毅然とした態度で、次のように考える。

私は癌にかかっている(中略)一般に言われるように、生死にかかわるものらしい。生死にかかわることならお手のものだわ。だって私は、死すべき運命について英文学のどの作品よりも深く追究しているジョン・ダンの聖なるソネットの研究者なのだから。それに自分が手厳しいと思っている。要求の多い教授。妥協は許さない。挑戦から眼をそむけることは決してない。だからこそ、偉大なE・M・アシュフォア教授の学生だったときにジョン・ダンの研究を選んだのだから。(12)

研究者としての誇りと自信に溢れるヴィヴィアンは、生死にかかわる癌という病に直面しても、自分は他の患者と違って取り乱すことなく冷静に対応できる、そしてこれから受けようとしている強力な未開発の治療にも耐えられると信じていた。それゆえに、ケレキアの「あなたは教授ですね」という問いかけは、彼女に有無も言わず治療を承諾させるのに極めて効果的に働いた。同じ学問に従事している「教授」であるという確認によって、この治療が「知識への貢献だ」といわれると拒む余地がなくなり、彼女は「知識への重大な貢献だ。8サイクルの化学療法。分かったわ、毎回最大量でやってもらうことにしよう」(18)と承諾する。研究者として、徹底的に真理を追究し続けてきたヴィヴィアンは、ケレキアやジェイソンと同様の知的好奇心に満ちている。彼らが自分の身体を分析し説明するのを見るにつけても、「医者たちが私を分析しているときは、何を意味しているのか知りたいものだわ。この専門分野では、彼らの方が私よりずっと多くの専門用語を持っていることは認めよう。私がそれに対して機先を制するには語彙を獲得することだ。」(43)と挑戦的である。このような野心や好奇心こそ、これまで多くのゴシック作品のヒーローたちが道を踏み外すきっかけとなったものである。

8サイクルに及ぶ治療の初期には、ヴィヴィアンは治療による苦しみも「学習」だと考え、強靱な精神力でジェイソンを教師の立場から見ている。彼がかつて自分の授業を受けたことがあると知り、「Aを出しておくべきだった」(29)とか、回診でケレキアがジェイソンの説明を褒めると「私の教え子よ」(37)と独りごとをいう。そして、研究のこしか頭にないジェイソンに、大学で教えていた時の自分自身を重ねて過去を回想する。ここで舞台は、大学の教室となり学生を前にヴィヴィアンがジョン・ダンの英詩の講義をしている場面に変わる。

（学生1に向かって厳しい口調で）このクラスに来るなら予習をしてきなさい。それができないなら、このクラスも、この学部も、いえ、この大学もお辞めなさい。そのどちらか以外を私は認めません。

（観客に向かって正当化するように）私は彼に教えてあげていただけよ。（学生1から離れてクラス全体に向かって話しかける）さて、ジョン・ダンのもう一つの鋭いウィットが効いている例があります：生命や神についての問題を解決するというより、その複雑さを楽しんでいるものです。（59-60）

ヴィヴィアンの講義は、ダンの詩の言葉遣いの難解さや韻について徹底的に分析するものであるが、それが伝えようとしている内容は見えてこない。ダンではなく、彼女自身が詩の言葉の難解さを楽しんでいるにすぎないように感じられる。そして、それを理解しない学生や、彼女の規則に従えない学生を見下して認めようとしない。課題の提出日を延ばして欲しいと申し出た学生に対する彼女の返答はこうである。

ヴィヴィアン：あなたのおばあさんが亡くなったのでしょうか。

学生1：どうしてご存知なのですか。

ヴィヴィアン：当てずっぽうです。

学生1：家に帰らないといけないのです。

ヴィヴィアン：お好きなように、でも課題の提出日は変わりません。（63）

この場面を回想して、現在自分が置かれている状況を鑑みた時、彼女は過去の厳格さをどのように考えればよいのか戸惑ってしまう。そして、当時の情け容赦ない、しかし研究に対しては徹底的に取り組む姿勢は、教え子ジェイソンの現在の姿と重なっていることを痛感する。この場面が、ジェイソンが「臨床期間」への不満をもらした場面のすぐ後に続くことから、ヴィヴィアンが「狂気の科学者」ジェイソンと同一視されていることが分かる。フランケンシュタイン博士が怪物を創造したように、彼女は学生であったジェイソンにこのような教育を施したのである。ジェイソンはスージーにヴィヴィアンのクラスの感想を聞かれた時、「唯一学んだことは、感傷なんて忘れろということだ。ベアリングの授業に比べたら、酸素運動の方がずっと詩的だよ」（77）と答えている。このことから、彼女は「狂気の科学者」ジェイソンの生みの親であるといえる。

V

ヴィヴィアンの学者としての誇りは、いかなる苦痛時にも弱音を吐くことを禁じ、彼女はまるで心の叫びや感情を表現する言葉を持ち合わせていないかのようなのである。薬の副作用で吐き気に襲われ弱りきっている時でも、気分はどうかと聞かれると大丈夫としか答えない。しかし、必死で保とうとしている学者としての威厳は、周りの医師たちには通用しない。胸部レントゲン撮影の際、彼女は自分の「教授」という肩書も、学者としての功績も病院では無意味であることを思い知らされる。

技師1：名前は。

ヴィヴィアン：私の名前ですか。ヴィヴィアン・ベアリングです。

ベアリング, B-E-A-R-I-N-G。ヴィヴィアン, V-I-V-I-A-N。

技師1：ドクターは。

ヴィヴィアン：ええ、私はPh.D. (博士号) をもっているわ。

技師1：あなたの主治医のことですよ。

ヴィヴィアン：ああ、ハーヴィ・ケレキアン先生です。(16)

「ドクター」と聞かれて、彼女は自分のことだと思うが、相手は主治医の名前を聞いたかっただけだと分かる。ドクターとしての自分が否定されたように感じた彼女は、技師が舞台そでに下がったあと、これまでの自らの功績についてとうとうと語り始めるが、それもすぐに「深く息を吸い込んで、少し止めてください」(17) という指示で遮られる。とどめの言葉は、ジェysonによる「ここでは、興味深いお仕事の話は必要ありません」(22) である。病院では彼女の社会的貢献が通用しないという事実を認識していくに従って、彼女が看護婦スージーとの人間的な触れ合いにすぎようになるのは皮肉である。

これまですべてを犠牲にして身につけてきた知識が、嘔吐を繰り返すたびに失われていくように感じるヴィヴィアンは、その悔しさを次のように吐露している。

もし私が本当に脳味噌を吐き出してしまったら、それは私の学問にとって大きな損失になるでしょうよ。もちろん私の同僚の多くはほっとするでしょうけど。学生にいたっては言うまでもないわ。(中略) もしもヴィヴィアン・ベアリングが脳味噌を吐き出してしまったという噂が広まったら(中略) そうね、同僚たちは、その大半は私の教え子だけど、私の後釜を狙って必死になるでしょう。(32)

ケレキアンやジェイソンと同様の「知の探究者」であった彼女は、それまでの自己の存在が消されていくのを感じるが、看護婦のスージーの優しさに触れて少しずつ自らの殻を破っていく。ある夜ヴィヴィアンは無性にスージーが恋しくなり、彼女を呼びだして、自分の恐怖心を初めて打ち明ける。自信が持てなくなったことを告白したヴィヴィアンは、学者としてではなく人間としてスージーと語れるようになる。そして、人との触れ合いの必要性を認めたヴィヴィアンは、ついに知への貢献を放棄して「蘇生拒否」を選択する。

スージーのおかげで心安らかになったヴィヴィアンの臨終直前に、大学時代に彼女の指導教授であったアシュフォード教授が病室を訪ねてくる。これが現実か、ヴィヴィアンの夢か定かではないが、アシュフォード教授はベッドに上がりヴィヴィアンに添い寝をして、ジョン・ダンの詩ではなく、マーガレット・ワイス・ブラウン作の絵本『家出うさぎ』を読み聞かせる。家出するという子うさぎに、どこへ行こうとどこに隠れようと母うさぎは必ず見つけるという話である。アシュフォード教授は、これは「魂のたとえ話で、どこに隠れても神様は見つける」（80）ということだと説明する。それを聞きながらヴィヴィアンは息を引き取る。スージーと心を割って話し合い、アシュフォード教授の母親のような優しさに触れることができたヴィヴィアンは、作者エドソンが言うように、確かに救われて昇天したといえよう。

作品の結末はともあれ、『ウィット』が研究に没頭するあまり魂や人間的触れ合いをなくした「狂気の科学者」たちの恐怖を描いているゴシック的作品であることは確かである。しかしながら、ブレグマン（Bertie Bregman）も指摘しているように¹¹⁾、問題は科学の探究そのものにあるのではなく、あくまでもそれに携わる人間の姿勢にある。その意味では、科学だけでなく、教師ヴィヴィアンの姿からも分かるように文学研究も同様である。研究対象が何であれ、それを扱う者の態度が「恐怖」を引き起こすのである。

参考文献

- Bregman, Bertie. "Blame the Scholar, Not the Discipline." *Lancet* 353 (1999): 851-52.
- Brustein, Robert. "Ways to Break the Silence." *New Republic* 219 (1998): 27-29.
- Deshazer, Mary K. "Fractured Borders: Women's Cancer and Feminist Theatre." *NWSA Journal* 15 (2003): 1-26.
- Givhan, Jennifer. "Crossing the Language Barrier: Coalescing the Mind/Body Split and Embracing Kristeva's Semiotic in Margaret Edson's *Wit*." *Women and Language* 32 (2009):

11) Bertie Bregman, "Blame the Scholar, Not the Discipline," *Lancet* 353 (1999): 852.

77-81.

Gordon, Suzanne. "Nursing and *Wit*." *American Journal of Nursing* 99 (1999): 9.

Keaveney, Madeline M. "Death Be Not Proud: An Analysis of Margaret Edson's *Wit*." *Women and Language* 27 (2004): 40-44.

Klaver, Elizabeth. "A Mind-Body-Flesh Problem: The Case of Margaret Edson's *Wit*." *Contemporary Literature* 45 (2004): 659-83.

Lamont, Rosette C. "Coma Versus Comma: John Donne's Holy Sonnets in Edson's *Wit*." *Massachusetts Review* 40 (2000): 569-75.

Martini, Adrienne. "The Playwright in Spite of Herself." *American Theatre* 16 (1999): 22-25.

Mulvey-Roberts, Marie, ed. *The Handbook to Gothic Literature*. Houndmills: Macmillan, 1998.

Renner, Pamela. "Science and Sensibility." *American Theatre* 16 (1999): 34-36.

Rimmon-Kenan, Shlomith. "Margaret Edson's *Wit* and the Art of Analogy." *Style* 40 (2006): 346-56.

Snodgrass, Mary Ellen. *Encyclopedia of Gothic Literature*. New York: Facts On File, 2005.

Wells, H. G. *The Island of Doctor Moreau*. (1986) London: Penguin, 2005.

Zinman, Toby. "Illness as Metaphor." *American Theatre* 16 (1999): 25.

サリヴァン, ジャック 『幻想文学大事典』 高山宏・風間賢二監修 国書刊行会 1999年。

ボルディック, クリス 『フランケンシュタインの影の下に』 谷内田浩正他訳 国書刊行会 1996年。